

地下水揚水量を経年的に整理したものを図-3.2.10 に示す。工業用水は昭和 55 年を除けば減少傾向にあるが、生活用水は人口の増加、生活様式の変化などによりわずかながら増加傾向にある。地下水への依存の割合は地域的に大きく異なり、京都市域では 12%と低いが、乙訓地区では 90%以上を地下水に依存している。

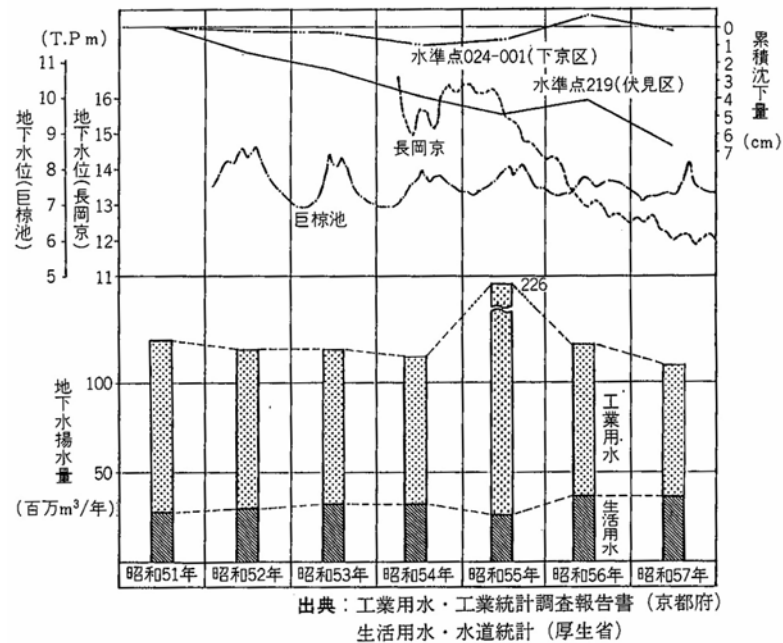


図-3.2.10 地下水揚水量、地下水位および地盤沈下の経年変化（出典：地下水要覧）

③淀川流域下流域の地下水利用高

地下水利用状況の地域的な違いは図-3.2.11 に示す地下水利用高マップで確認できて、この図からは京都盆地内の揚水強度が大きいことが分かる。

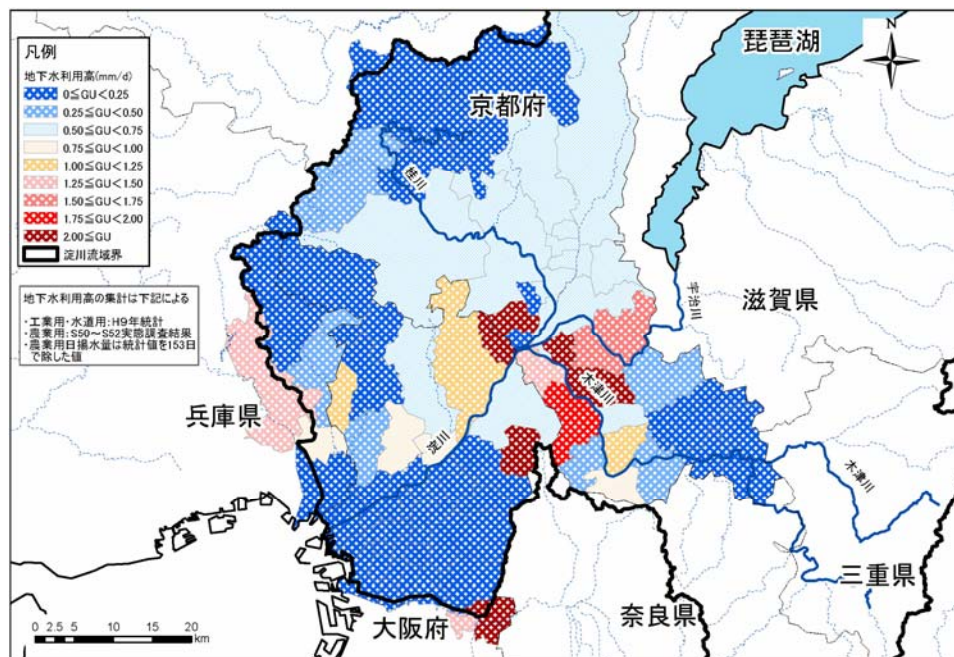


図-3.2.11 1997 年の地下水利用高マップ(出典：地下水マップ)

(5) 地下水位の変化

①大阪平野

図-3.2.12は大阪平野内の代表的な観測点での地下水の変動を示したもので、これによると、昭和50年代半ば以降地下水位は横ばい～上昇傾向にあり、昭和40年代に過剰揚水のために低下していた地下水位は回復基調にあるとみなすことができる。

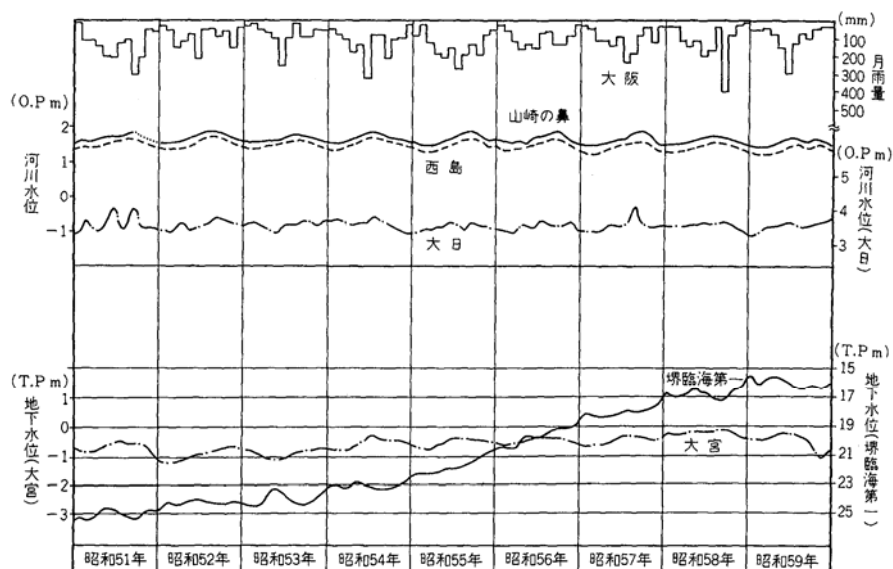


図-3.2.12 大阪平野内の河川水位と地下水位の経年変化（出典：地下水要覧）

②京都盆地

図-3.2.13は地下水位の変動図であるが、夏に高く冬に低い値を示しており、河川水の変動ともよく対応しているところから、両者の交流は盛んであるとみなすことができる。経年的には長岡京市を除いて変化はあまりみられない。また、伏見では昭和20～25年ころには地上1～4mくらいまで自噴していた井戸がみられたとのことであるが、最近ではそれがみられなくなっている。

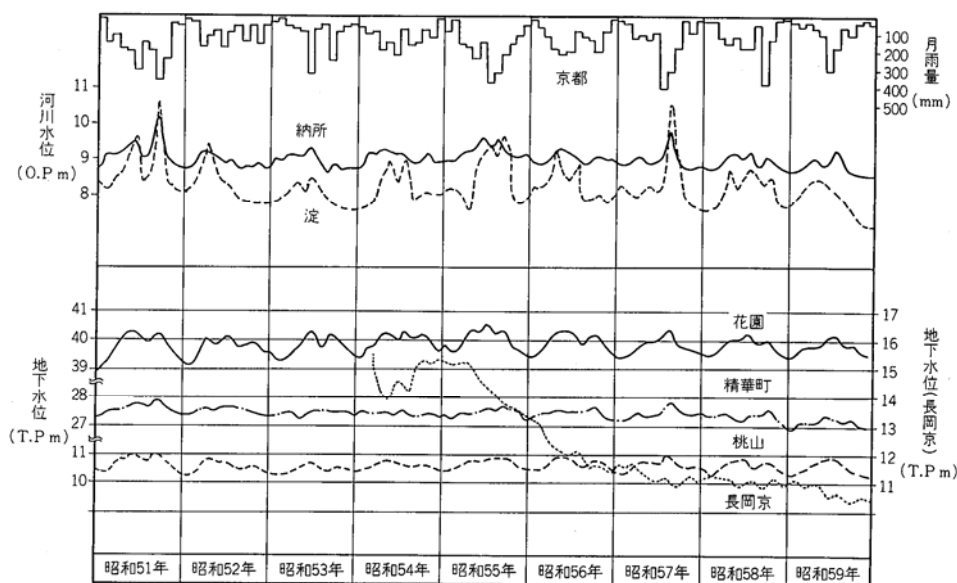


図-3.2.13 京都盆地内の河川水位と地下水位の経年変化（出典：地下水要覧）